

まち ど い せき まち ど く よう づか
市原市待戸遺跡・待戸供養塚

1 9 9 4

市原市水道部水道建設課

財団法人 市原市文化財センター

序 文

房総半島のほぼ中央に位置する市原市は、文化財の宝庫ともいわれ、先人達の足跡が多く記されている地域であります。今年度は、上総国分尼寺の中門の復元がなされると同時に尼寺展示館もオープンしたところです。すでに、一万人を越える、多くの方々に足を運んでいただいているところです。一方で、いまだに所在が判然としない上総国府をめぐる議論も活発になされるなど、未解決の過題も多く残され、また、開発・環境との調和をはかりながら、いかに文化財の保護・活用を図っていくかという重い課題をつねに背負っているという状況があります。

今回報告します待戸遺跡・供養塚は、平成2年度に牛久配水池の築造に先行して、記録保存を目的として調査を行った遺跡です。小規模な調査ながら、平安時代の集落の一部をとらえる事ができました。市のほぼ中央に位置する、牛久地区を中心とする一帯の歴史像については、まだはっきりとしない部分も多くあります。このような状況のなかで、今回の成果をどう位置付けるかは今後の課題とすべきかも知れませんが、県内でも珍しい鋸の出土など、当時の流通の一端を伺わせるものとして興味深いものがあります。

本書が、研究者のみならずひろく市民の方々にも活用されることを期待するとともに、文化財行政に対するより一層の理解と協力をお願い申し上げます。

最後に、今回の発掘調査および本書の刊行に際し、ご指導、ご協力を賜りました関係諸機関に対し心から感謝の意を表する次第です。

平成6年3月

財団法人 市原市文化財センター
理事長 植 草 久 善

例 言

- 1、本書は千葉県市原市西国吉字待戸130-1他に所在する待戸遺跡・待戸供養塚の発掘調査報告書である。
- 2、調査は、牛久配水池築造工事に先行して実施されたものであり、市原市（水道部水道建設課）の委託により、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもとに財団法人市原市文化財センターがおこなった。
- 3、待戸遺跡の調査対象は1750㎡であり、うち10%にあたる 175㎡について確認調査を実施し、この結果を受け、150㎡について本調査をおこなった。供養塚については、480㎡について調査を実施した。
- 4、発掘調査・整理作業は、下記のとおり行った。なお、いずれについても高橋康男が担当した。
平成2年12月1日～平成3年1月27日 待戸遺跡確認調査・供養塚調査
平成3年1月28日～平成3年2月28日 待戸遺跡本調査
平成5年4月1日～平成5年5月31日 整理作業
- 5、本書の作成・執筆は高橋が担当した。
- 6、財団法人市原市文化財センター調査コードは、(セ129)である。
- 7、本報告による遺構番号は、調査段階のものとは異なる。遺物注記は旧番号による。その対照については、下段に示した通りである。
- 8、調査にあたり、宗教法人医光寺、市原雄忍氏の御協力を得た。記して謝意を表する次第である。

目 次

本文目次

序 文

例 言

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査の概要	1
第3章 調査した遺構と遺物	6
第4章 まとめにかえて	14

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の地形	2
第2図 待戸遺跡・供養塚と周辺の遺跡	3
第3図 調査範囲と周辺の地形	4
第4図 待戸遺跡トレンチ配置図	4
第5図 待戸遺跡第4トレンチ実測図	5
第6図 1号(住居)実測図、出土遺物実測図	7
第7図 2号(住居)実測図、出土遺物実測図	8
第8図 3号・4号(土坑)および出土遺物実測図	9
第9図 台地整形部およびピット群検出状況	10
第10図 待戸供養塚現況測量図	11

第11図 供養塚土層断面図	11
第12図 供養塚下層遺構実測図	12
第13図 遺構外出土土器実測図	13
第14図 鉄製品実測図	14
第15図 古銭拓影	14

表目次

第1表 待戸遺跡供養塚と周辺の遺跡	1
第2表 1号(住居)出土土器観察表	8
第3表 2号(住居)出土土器観察表	8
第4表 3号(土坑)出土土器観察表	9

待戸遺跡・供養塚遺構番号等新旧対照表

新 名 称	種 別	旧 番 号
1 号	住居跡	0 0 4
2 号	〃	0 0 6
3 号	土 坑	0 0 3
4 号	〃	0 0 4
台地整形部		0 0 5, 0 0 7
供養塚		0 0 1

第1章 遺跡の位置と環境

今回の調査箇所は2か所に分かれている。一箇所は待戸古墳として調査した、標高約110mの丘陵北縁部、もう一箇所は同丘陵の西側裾部、標高約70mの緩斜面である。遺跡分布図においてこの一帯は皆吉城跡とされているが、これは台地縁辺部に台地整形が断続的に認められることによっている。ここでは、付近一帯の環境についてふれることとする。

遺跡の所在する丘陵は東側に養老川、西は同川の支流が流れ、北側の先端は舌状にのびる形となっている。この舌状にのびた台地状には、市原市の代表的な城郭跡のひとつである、佐是城跡が存在する。同城跡については、比較的遺存状態もよく、貴重な城跡として将来的には整備されていくこととなるが、現段階においては実態が不明な点も多く、詳細は今後の調査等に委ねられる。

話は、やや前後するが、養老川中流域においては、右岸では比較的発掘調査の実績が蓄積されているが、左岸においては、まとまった調査例がすくない。これは、開発側の事情によるものではあろうが、そのことにより養老川中流域の歴史の全体像はいまだにつかみ切れていないと言える。今回の調査に先行する調査例としては、国道409号線の工事に際して発見、調査された西国吉横穴群、また市指定文化財である吉野一号墳の周溝の一部の調査をあげることができる。これら遺跡の詳細については調査報告書にゆずることとしたいが、これら墳墓の築造の基礎となる集落の実態は不明なまま残されている。なお、今回の調査とほぼ並行する時期に、佐是城本丸に近接する部分の調査が行われ、弥生時代後期の集落の存在が明らかになっている。佐是城の存在する台地の北縁部は佐是古墳群といわれ、いまだに数多くの古墳が残されている地区でもある。時期的にはことなるものの、一帯が継続的に生活拠点となっていたことを伺わせる。

房総半島東岸に多くの分布をみる横穴群が本地域一帯に展開していることは、太平洋側との人的交流を伺わせるものであり、養老川流域という側面だけではなく、太平洋側からの影響についても注意しておく必要がある。両地域の文化的様相の相違について言及するだけの材料はないが、今後当地域の歴史を考えていくうえでは、両文化の接点として注意しておくことが求められよう。

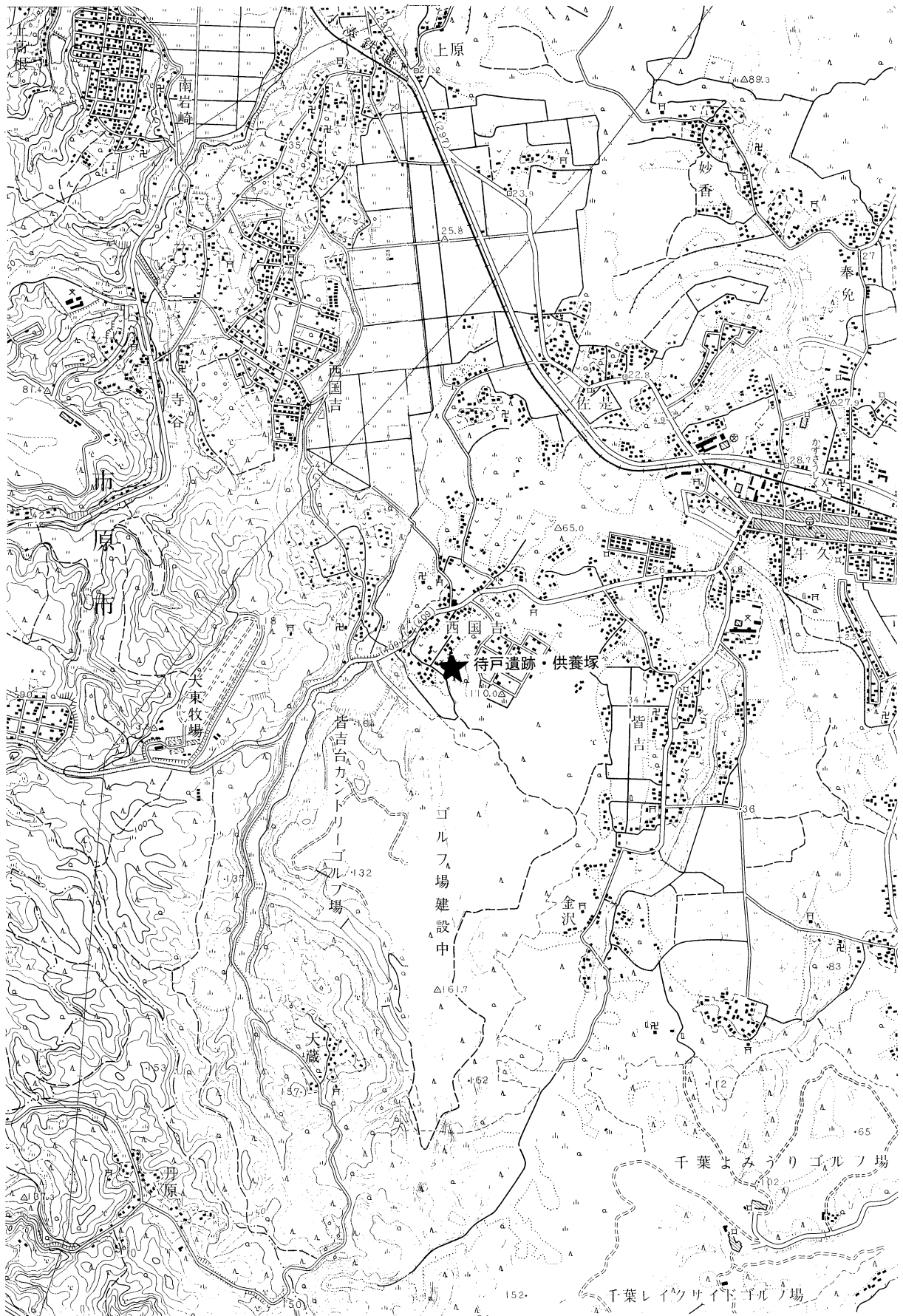
第2章 調査の概要

調査が二箇所に分かれたことは、冒頭にふれた通りである。調査の手順としては、待戸古墳と散布地である待戸遺跡の確認調査を併行して行い、確認調査の結果をうけて待戸遺跡の本調査を行った。

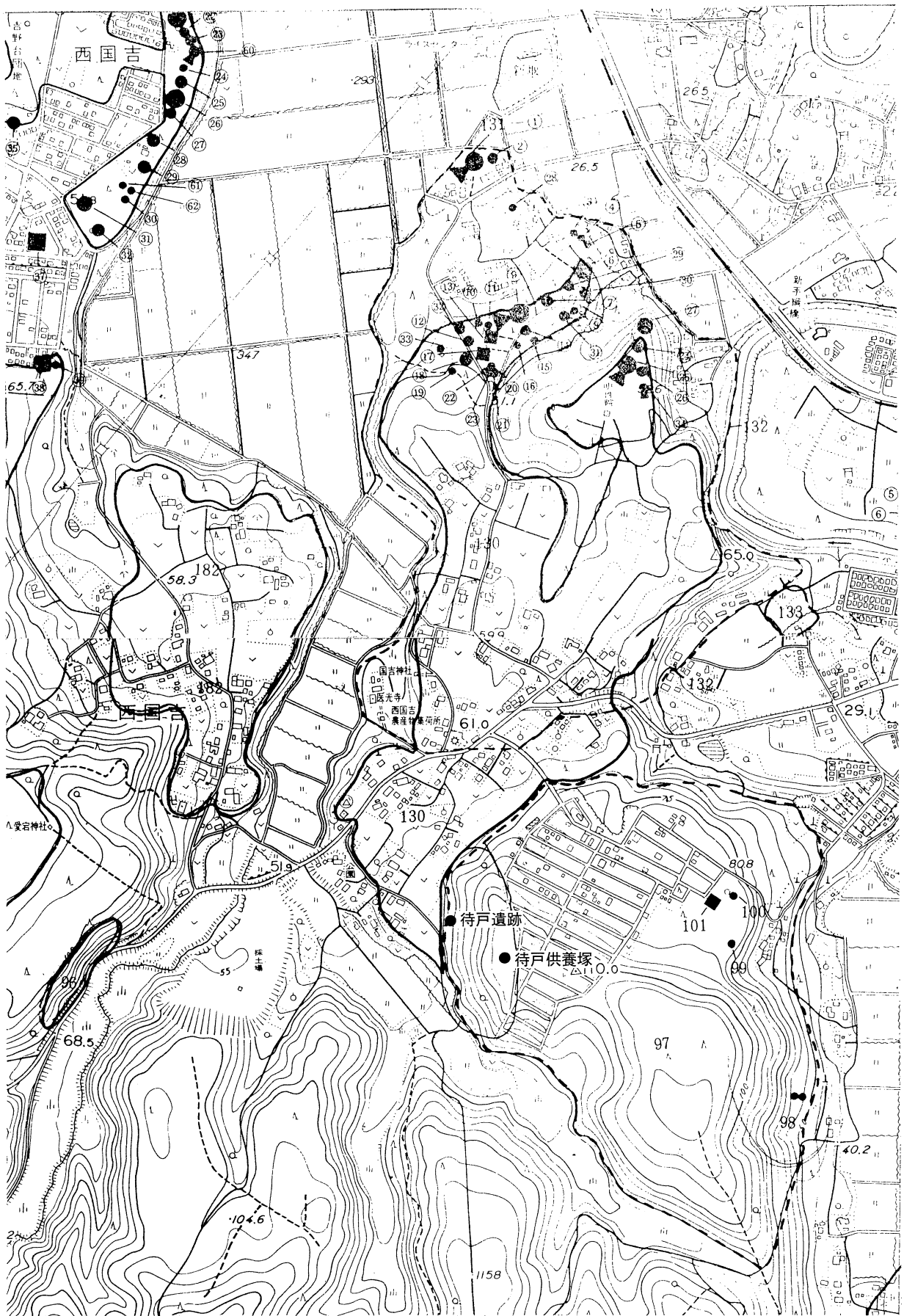
詳細についてはのちに見る事とするが、待戸古墳の調査では、周溝は検出されず、盛り土内に主体部とおぼしき痕跡も検出されなかったところから、古墳ではなく供養塚と判断するにいたった。ただし、塚の性格そのものを規定するような遺物の出土が認められたわけではない。なお、この地点から

第1表 待戸遺跡・供養塚と周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	時期	番号	遺跡名	種別	時期
95	永井台遺跡	包蔵地	縄文他	128	南岩崎遺跡	包蔵地	縄文・古墳
96	西国吉横穴群	横穴	古墳	130	西国吉遺跡	包蔵地	縄文・古墳
97	皆吉城跡	城跡	不明	131	佐是古墳群	古墳	古墳
98	天下塚	塚	不明	132	佐是城跡	城跡	中世
99	白水作古墳	古墳	古墳	133	鶴巻遺跡	包蔵地	古墳
100	萩ノ台古墳	古墳	古墳	182	西国吉関ノ台遺跡	包蔵地	縄文・古墳
101	萩ノ台三山塚	塚	近世				



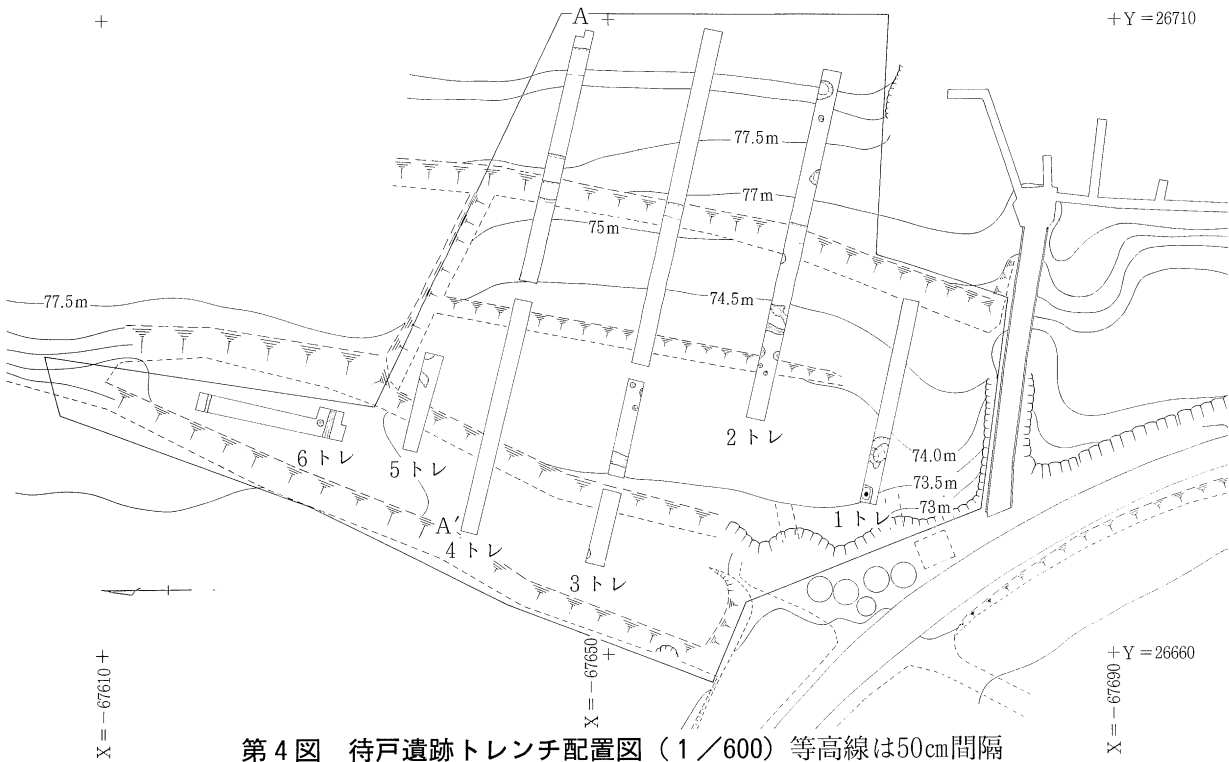
第1図 遺跡の位置と周辺の地形 (1/25000)



第2図 待戸遺跡・供養塚と周辺の遺跡（1/10000,市遺跡分布図より）



第3図 調査範囲と周辺の地形 (1/2500)

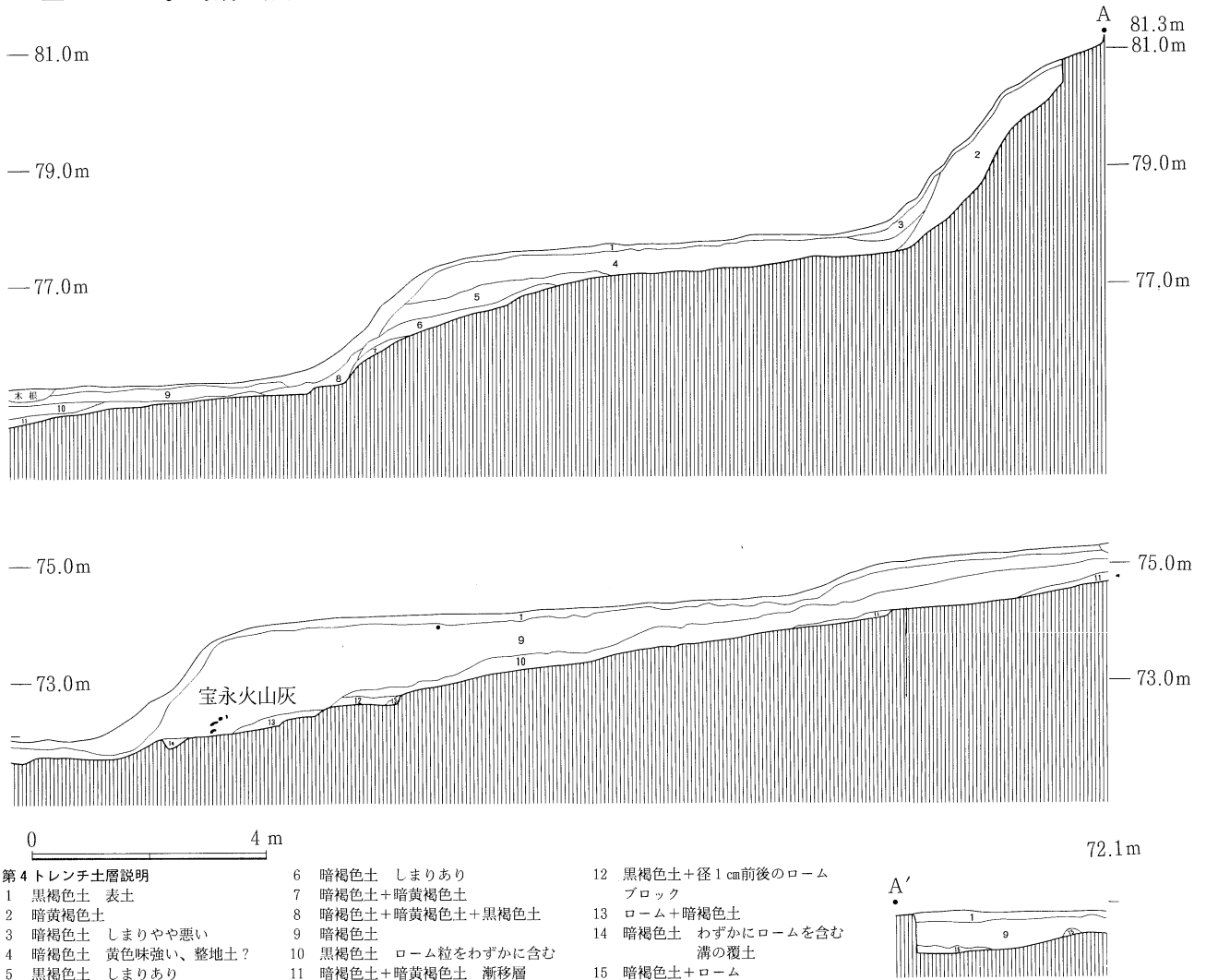


第4図 待戸遺跡トレンチ配置図 (1/600) 等高線は50cm間隔

は、ハケメを有する土器の破片が得られており、周辺に当該時期の集落が存在していた可能性がある。丘陵西側の斜面一帯はすでに宅地造成が行われており、旧状を留めていないので、可能性の指摘にとどまる。

待戸遺跡の確認調査では、斜面に直行する方向に5本のトレンチを設定し、最下段の平坦部に一本のトレンチを設定した。この斜面には数段の台地の整形がみられたが、整形土中に宝永の火山灰がブロック状に認められた部分があり、このことからこれらは、近世以降の整形であることが明らかとなった。これらトレンチのうち第4トレンチの状況についてのみ図示しておく。各トレンチからは、円礫や縄文土器片が得られたが、当該時期の遺構はほとんど検出されず、わずかに第1トレンチの西端で土坑が検出されたのみであった。第4トレンチでは小土坑から土師器甕が出土し、第5トレンチではカマドの痕跡とおもわれる粘土の散布および土器の出土が認められた。この確認調査の結果を受けて、丘陵裾部の第4トレンチより南側の150㎡について本調査を実施した。

本調査の結果、住居跡2軒、土坑2基、溝跡等を検出した。住居跡2軒のうち一軒ではカマド周辺および床直上から奈良・平安時代の所産と位置づけられる土器が出土した。なお、斜面清掃中に鋸が出土している。時期を限定しうるものではないが、数少ない出土例の一つに位置づけることができよう。



第5図 第4トレンチ実測図 (1/120)

また、一つの土坑からは土師器の甕が出土し、それはほぼ完形に復元された。

なお、土器容量の計測にあたっては、坏類のように円錐台形近似のものについては、口径・底径・器高の内寸値を計測し、それぞれをA、B、Cとした場合、容量 $=1/12\pi C(A^2 + B^2 + AB)$ で、実際に砂粒をいれた場合の容量に近似する値がえられることを、本遺跡1号住居跡出土の完形の坏（第6図2）において確認したので、同式を用いて容量値とした。甕については、同式の応用は困難であるので、高さ1cmの円柱の積み上げとみなして求積した。

なお、上記式の詳細については高橋「器の大きさ－外容積からみた奈良・平安時代の土器－」『市原市文化財センター 研究紀要Ⅱ』1993を参照されたい。

第3章 調査した遺構と遺物

1) 住居跡

1号（住居）

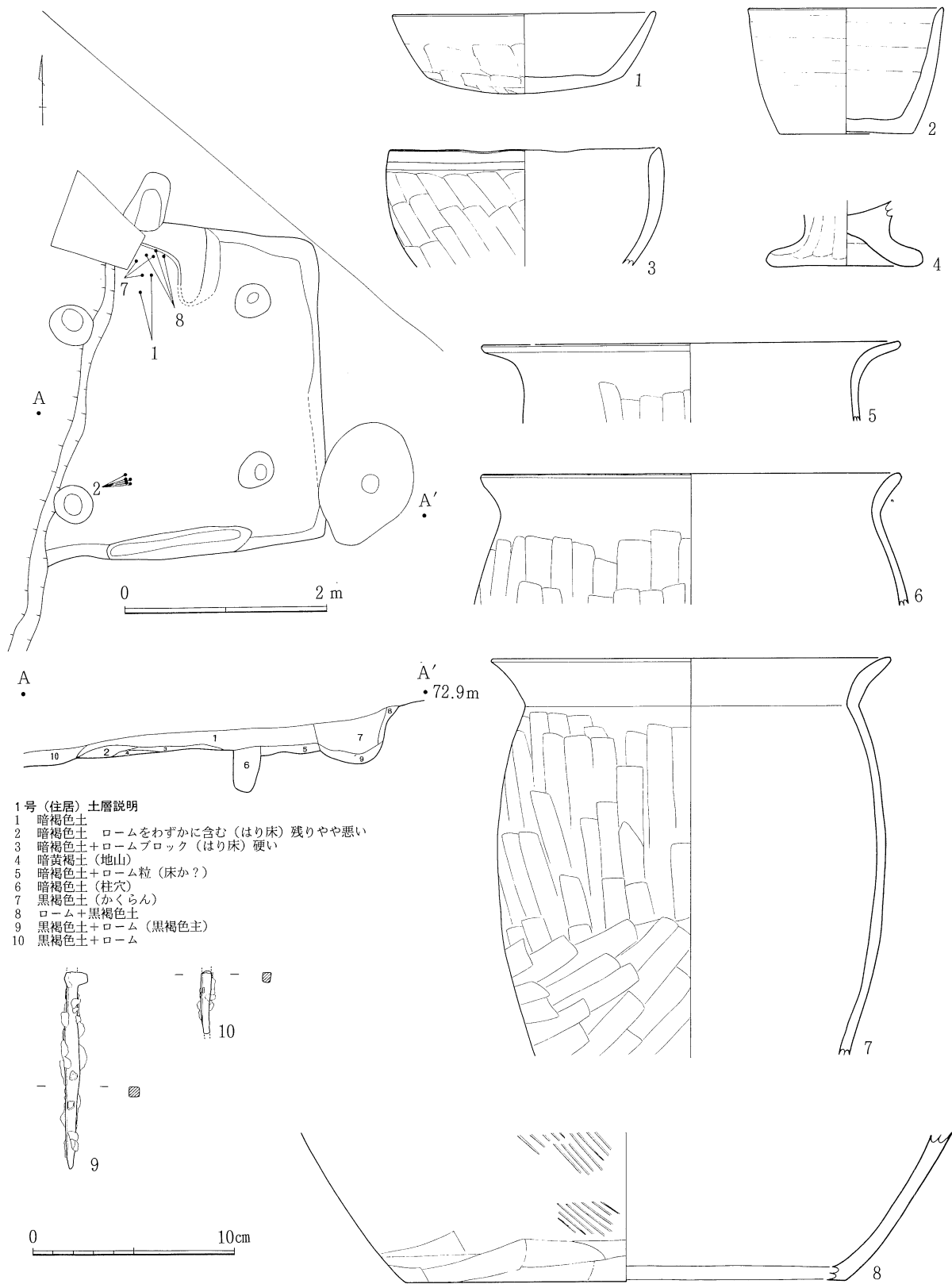
確認調査でカマドが検出された住居跡である。一辺約3mの正方形を呈したものと思われるが、西辺については土砂の流出により立ち上がりは残存していない。北辺ほぼ中央にカマドをもち、柱穴は4か所捉えることが可能であった。柱穴間はいずれも約1.9mである。床の残存状況はかならずしも良好ではなかった。南辺の壁際には断続的に周溝が巡らされる。

遺物は、図示したものがカマド周辺および床直上から検出された。詳細については観察表の記述にゆずることとするが、1の土師器の坏は8世紀中葉、2の須恵器の坏については還元している部分が少ないところから、永田・不入窯跡群の製品であるとするなら、その中でも最終末に近い時期、現在知られている窯跡では永田16号窯跡の製品に近い感がある。その場合、年代的には8世紀末から9世紀初頭といった年代が想定されよう。この二者間に年代観のずれが生じることとなるが、カマド内あるいは床直上の出土であるので住居跡に伴うものとしての位置づけに疑問をはさむ余地はないと考えており、当該時期の土器の共伴の実態を示すものとして捉えておくべきであろう。8の須恵器の甕については、胴部下半にタタキの痕跡が認められる。焼成は必ずしも良好ではない。生産地については現段階では不明である。他の甕については口縁部の開き具合等一様ではないが、いずれも垂直方向にケズリの痕跡が認められる。また、台付甕の台部の破片が出土している(4)。また、鉄釘が2本出土している。

2号（住居）

確認調査時には確認されていなかったが、本調査範囲の表土除去に際して検出されたものである。西半は後世の台地整形により欠失している。東辺のみが僅かに残存している状況であった。この東辺は約3mをはかり、これがほかの3辺についても同様であったとするならば、すでに触れた1号住居とほぼ同規模ということになる。床の残存状況は良好ではなく、柱穴については不確定である。周溝については全周するものと思われる。カマド等については検出しえなかったが、土層断面中にわずかに粘土の散布が認められるところから、北カマドであった可能性がある。

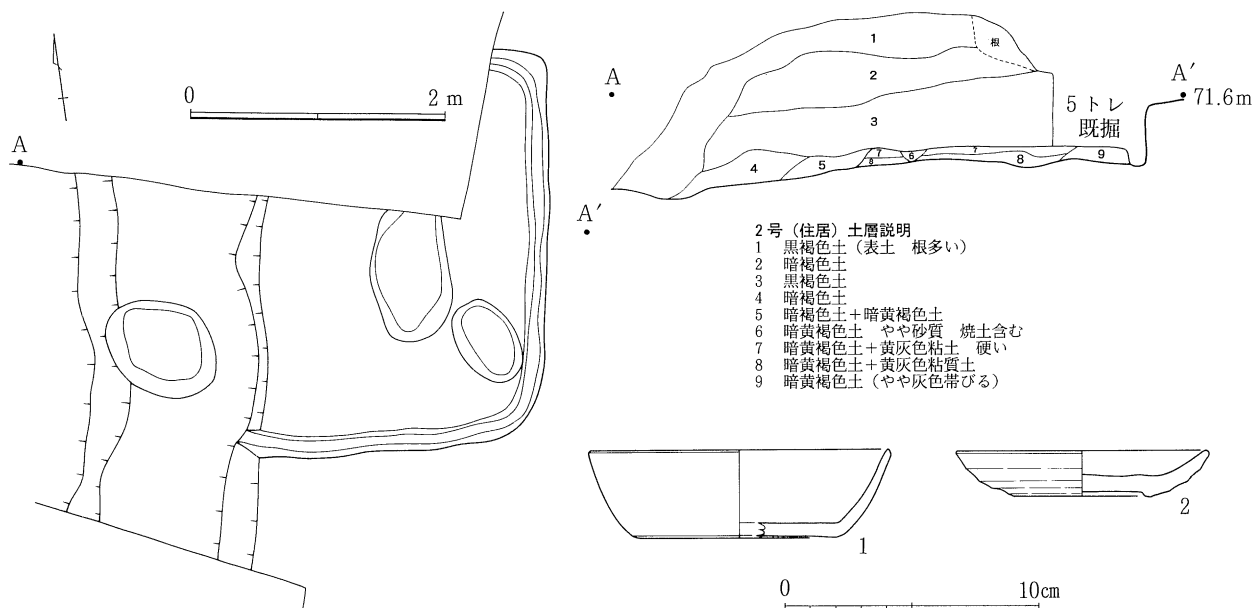
住居に伴う遺物の出土は認められなかった。図示したのは覆土出土の須恵器の坏(1)と陶器の皿(2)である。この皿は全面に錆釉が施されている。断面は灰色を呈している。時期・産地とも不明とせざるを得ない。このほか覆土中からは、土器片等が出土しているが、これらについては後に見ることとする。



第6図 1号(住居)実測図(1/60), 出土遺物実測図(1/3)

第2表 1号(住居)出土土器観察表

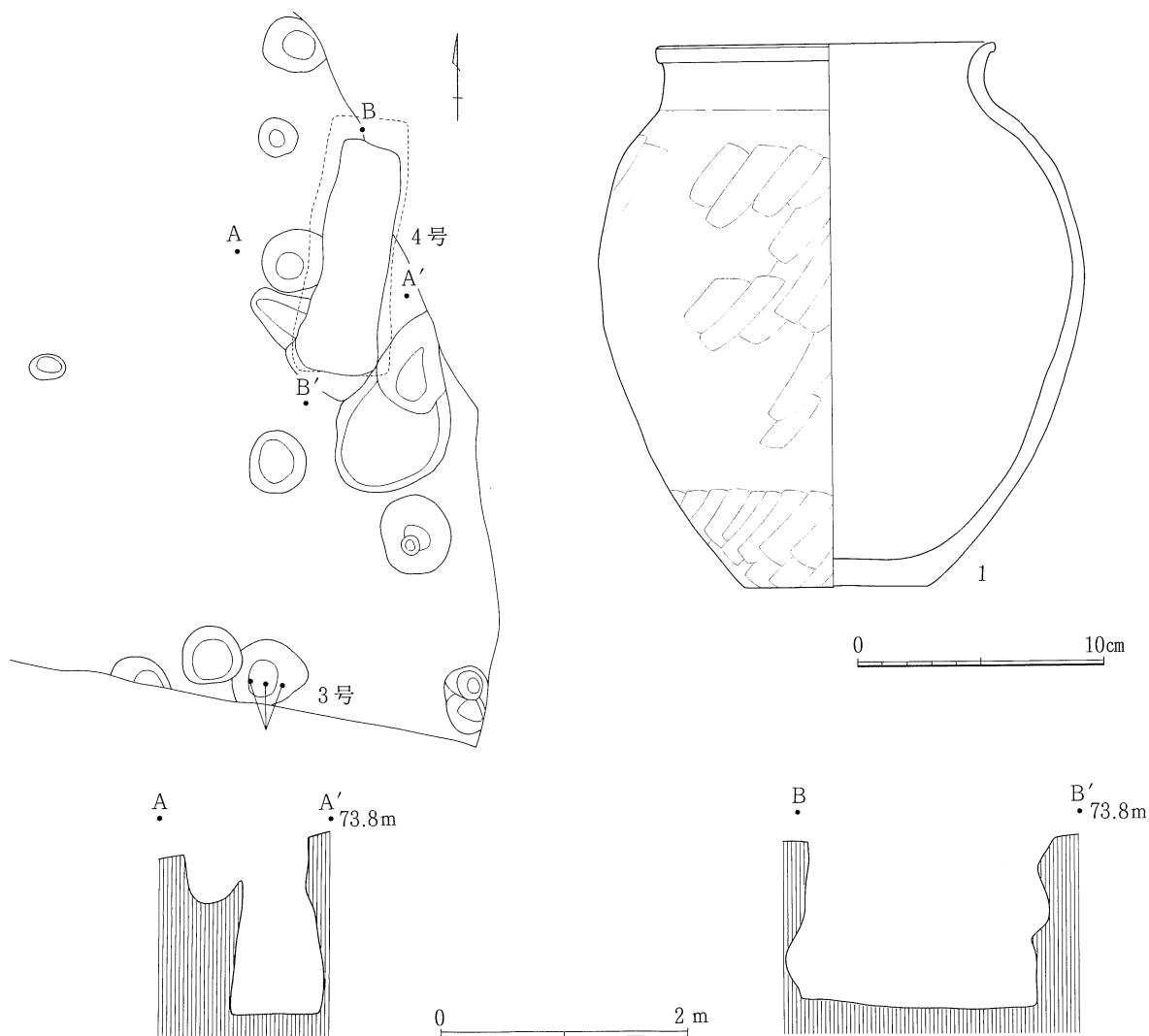
No.	種類	器種	部位	法量 (cm)	技法	胎土	色調	容量 (cm ³)	備考
1	土師	杯	1/2 弱破片	口径13.0 底径9.7 器高4.0	内面: ヨコナデ(?) やや不明瞭 外面: ヨコナデ(?) やや不明瞭 横位のケズリ 円周方向のケズリ 弦方向のケズリ	赤褐色粒子 目立つ	暗褐~橙	253	焼成普通
2	須恵	鉢	ほぼ完形	口径9.6 底径6.6 器高6.3	内面: ヨコナデ 外面: ヨコナデ 底部回転ヘラ切り 無調整	比較的精良 白色微粒含 む	暗褐色 外部一部 暗灰色	260	焼成良好
3	土師	鉢	口縁	口径13.4	内面: 横位のナデ 外面: 横位のナデ 左傾斜したケズリ	砂粒やや多 い	橙~暗赤 褐		焼成良好
4	土師	台付甕	脚部	脚部底径7.2	内面: ナデ 外面: 縦位のケズリ	白色粒子や 目立つ	暗褐~橙		焼成普通
5	土師	甕	口縁	口径20.8 底径16.3	内面: 横位のナデ, ナデ 外面: 横位のナデ ナデ, ケズリ	砂粒やや多 く含む	橙		焼成良好
6	土師	甕	口縁	口径20.7 頸径18.9	内面: ナデ 外面: 縦位のケズリ	砂粒やや多 く含む	橙		焼成良好
7	土師	甕	口縁	口径19.8 頸径16.6	内面: 横位のナデ, ナデ 外面: 縦位のケズリ	砂粒やや多 く含む	橙~黒褐	(4633)	焼成良好
8	須恵	甕	底	底径22.0	内面: 整形不明瞭 外面: 一部タタキ残す 手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	雲母微粒含 む	暗灰		焼成やや甘い



第7図 2号(住居)実測図(1/60)出土遺物実測図(1/3)

第3表 2号(住居)出土土器観察表

No.	種類	器種	部位	法量 (cm)	技法	胎土	色調	容量 (cm ³)	備考
1	須恵	杯		口径11.8 底径7.7 器高3.0	内面: ヨコナデ 外面: ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ	比較的精良	暗褐~灰 褐	233	焼成普通
2	陶器	皿		口径9.8 底径5.2 器高1.8	内面: 褐釉 外面	微砂粒多く 含む	暗橙 断面灰	43	焼成良好



第8図 3・4号(土坑)および出土遺物実測図

第4表 3号(土坑)出土土器観察表

No.	種類	器種	部位	法量(cm)・形態の特徴	技法	胎土	色調	容量 (cm ³)	備考
1	土師	甕	ほぼ完形	口径13.6 底径7.5 器高22.1 頸径13.0	内面：横位のナデ 底部整形不明瞭 外面：横位のナデ、ナデ 右傾したケズリ のちナデ 右傾したケズリ のちナデ(ナデの 部分多い) 右傾 したケズリ 弦方向のケズリ	砂粒多く含む	橙～暗褐	4020	焼成良好

2) その他の遺構

3号(土坑)

調査区の南東隅付近で検出された。直径約50cmの不整な円形を呈する。この土坑からは、土師器の甕の比較大型の破片がまとまって出土し、それはほぼ完形に復元された。外面の整形は不明瞭な部分が多いが、やや右傾したケズリの痕跡が認められる。特に底部直上部分においてその痕跡を多くのこしている。1号住居出土の甕類では垂直方向のケズリに限定されることと比較すると、その相違は明らかであるが、時期的な位置づけについては確固たる指標をもたない。

4号(土坑)

3号土坑の北約2mの地点で検出された。長軸をほぼ南北にもつ長方形を呈する。確認面において長軸約2m、短軸約0.5mである。下端の方で全体に若干広くなる。底面は、比較的平坦であった。床面・覆土からも良好な遺物の出土はなく、性格・時期ともに不明である。

台地整形部およびピット群

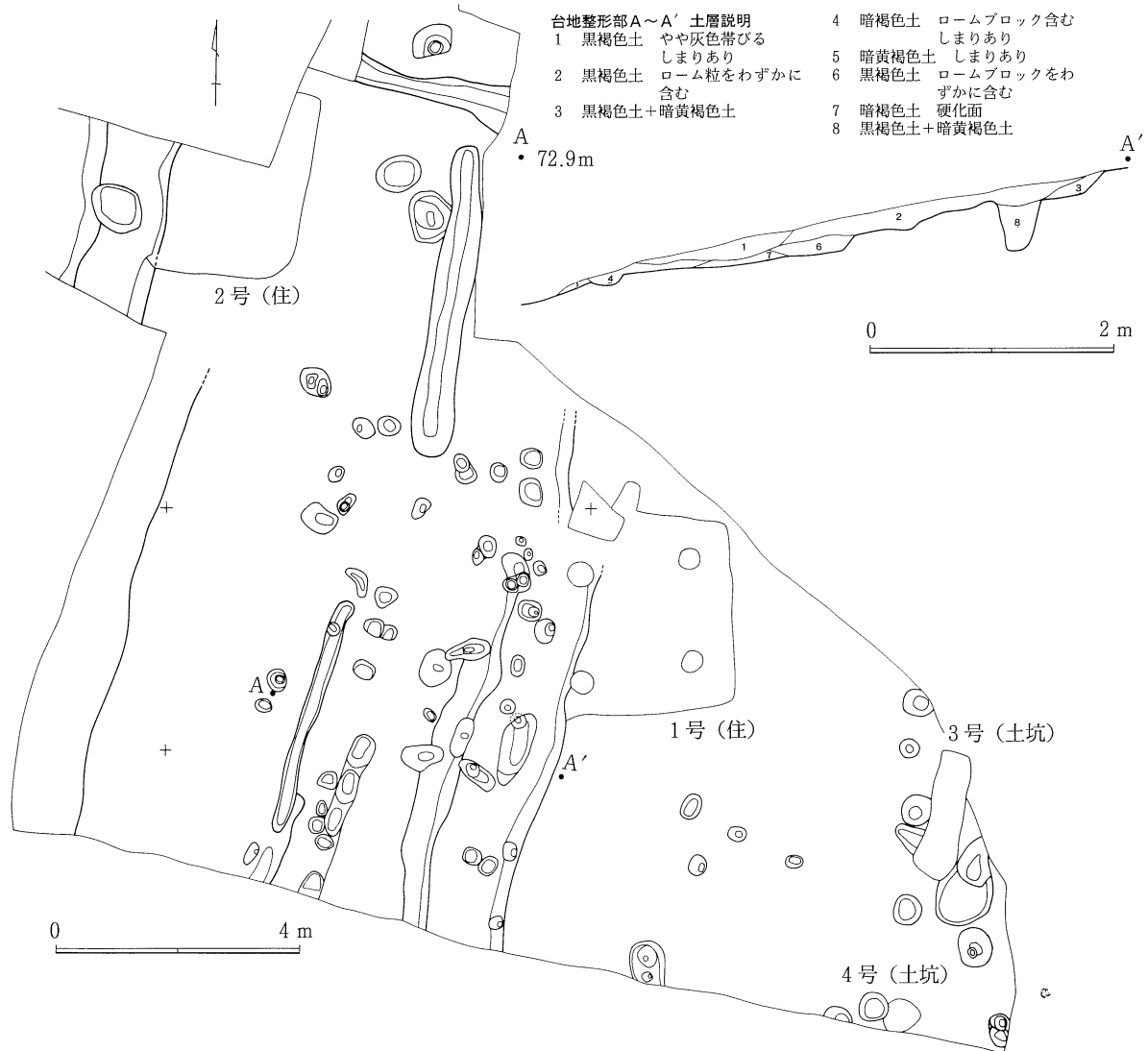
上に述べてきたような遺構の他に、斜面に平行する形で、断続的な浅い溝やピットが検出されている。本来それらの一部は何らかの有機的關係を有していたものとも思われるが、その復元は困難であった。確認調査段階で、表土内に宝永の火山灰がブロック状に検出されているところから、これら溝・ピットについては、宝永年間を遡るものと考えられるが、上限については明確な根拠を欠く。

待戸供養塚

当初は待戸古墳として調査を開始したのものであるが、先行しておこなったトレンチ調査の結果、周溝をもたないものであることが明らかになり、盛土も褐色系の土をあまり突き固めることなく盛り上げたような様相を示し、さらに良好な遺物の出土がなく、主体部の検出もなかったところから、何らかの供養の為の塚であると最終的に判断されるに至った。

形態的には不整な円形を呈し、調査着手時点の直径は約8m、高さ約1mであった。

なお、盛り土および旧表土の除去後、下層遺構の検出につとめたが、図示したように、若干の焼土の



第9図 台地整形部及びピット群検出状況 (1/120,土層断面は1/60)

集中および溝・ピットが検出されたにとどまった。また、遺物の出土は皆無であった。

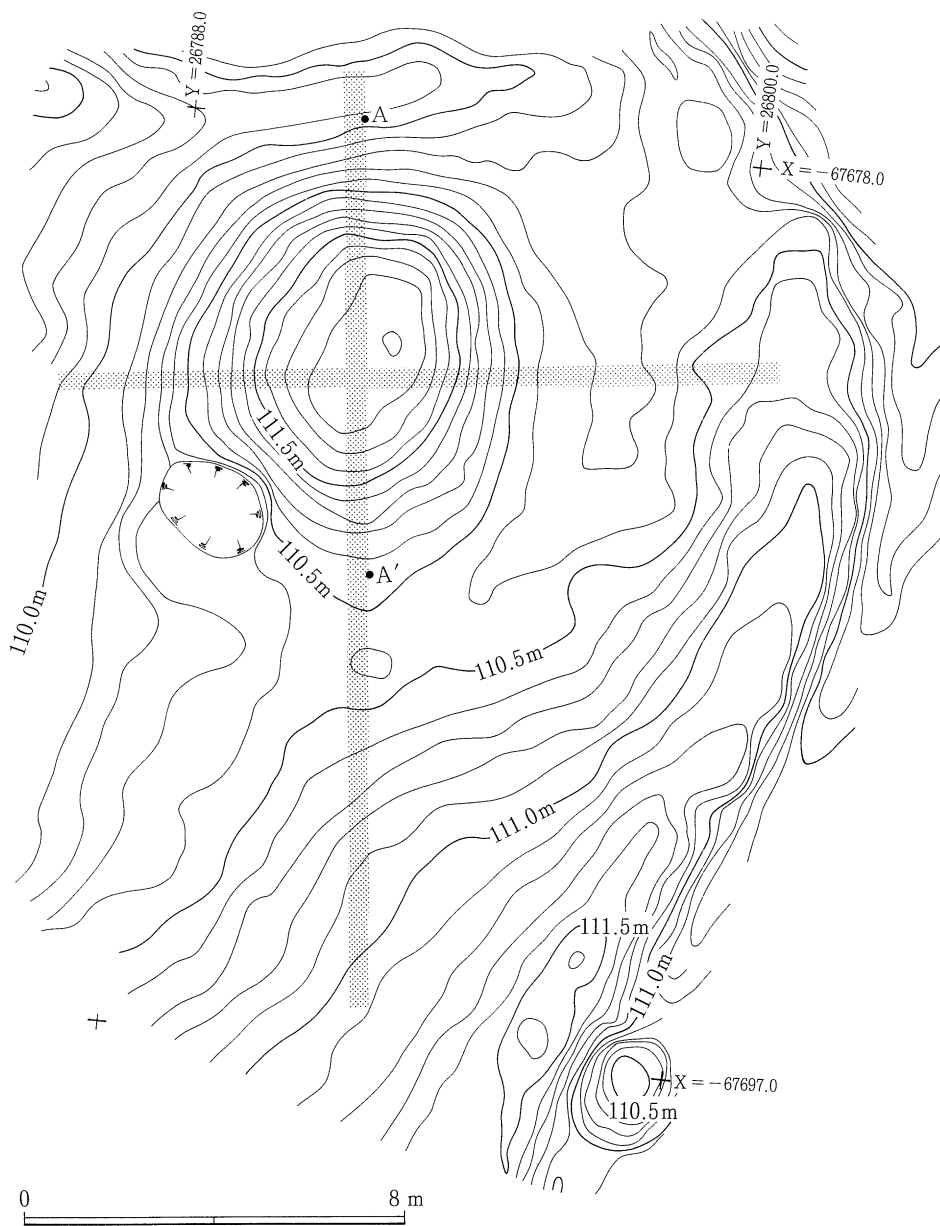
この焼土の集中した部分においては、長方形の土坑の存在が確認された。当該部分を掘り下げたが、図示した通り浅い土坑であり、遺物の出土はなかった。

3) その他の遺物

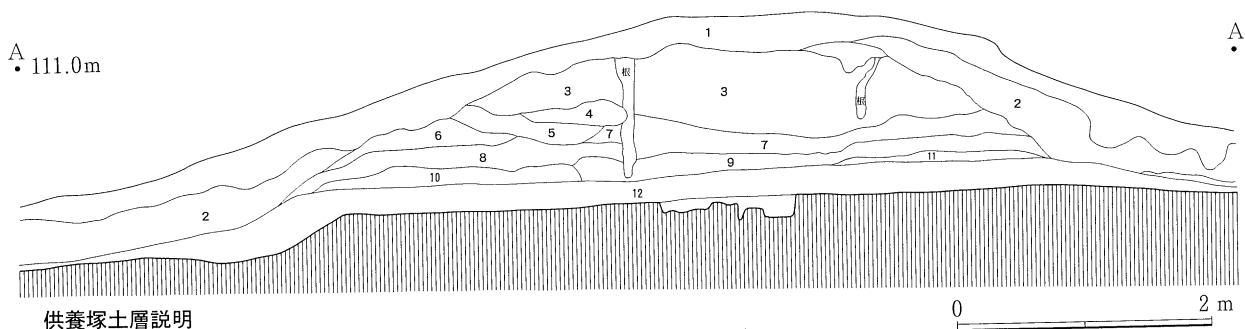
これまでに図示してきた以外に、以下に図示するような遺物が出土している。遺構に伴う物ではないが、当地の歴史の一端を示す物として位置づけられる。

(1) 土器

確認調査時、および斜面部の本調査に



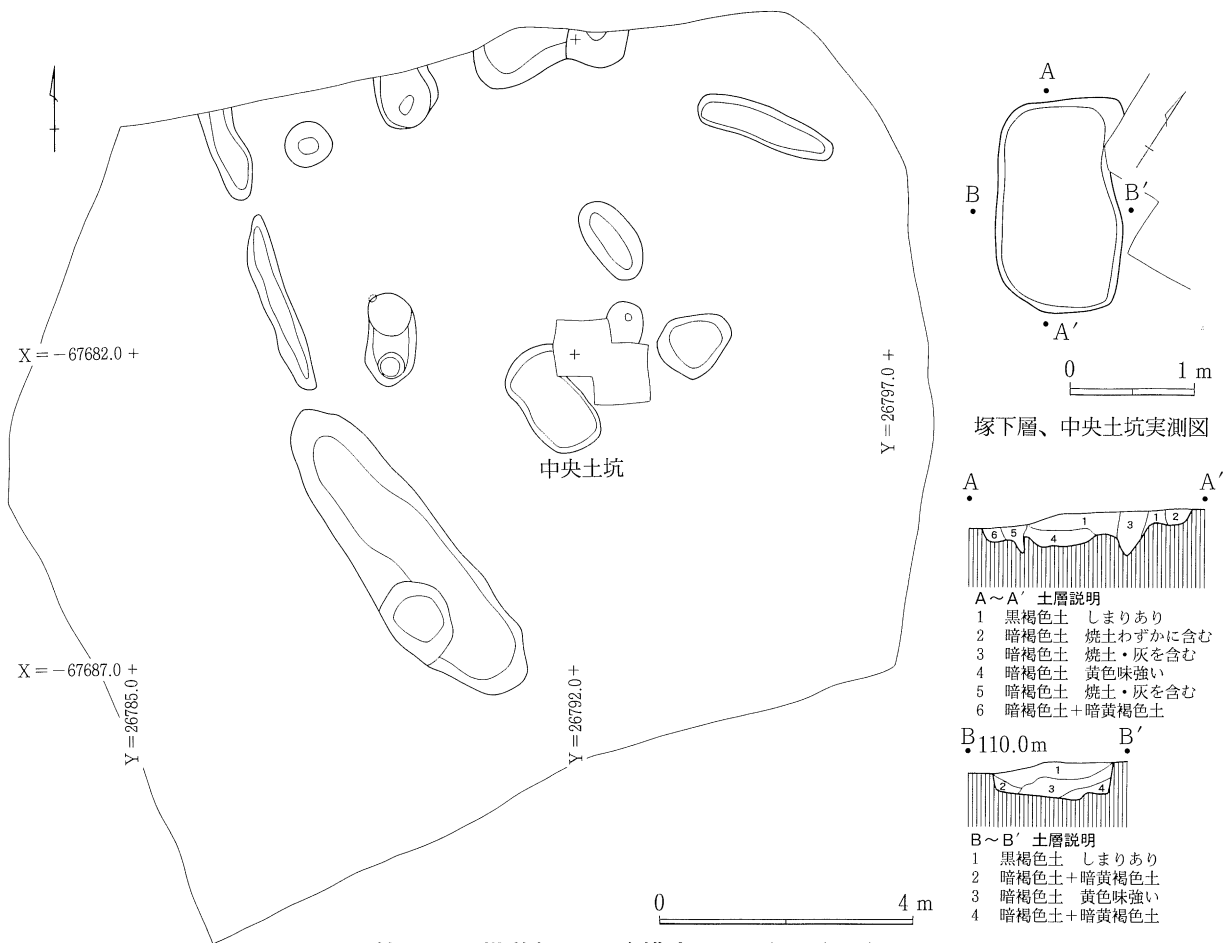
第10図 待戸供養塚現況測量図 (S = 1 / 160)



供養塚土層説明

- | | |
|-----------------|----------------------|
| 1 黒褐色土 表土 | 7 黒褐色土 暗黄褐色の斑あり |
| 2 暗褐色土 | 8 黒褐色土 |
| 3 暗褐色土 暗黄褐色の斑あり | 9 暗褐色土 黒褐色土を含む |
| 4 暗褐色土+暗黄褐色土 | 10 暗黄褐色土+暗褐色土 |
| 5 暗黄褐色土+暗褐色土 | 11 黒褐色土 |
| 6 暗褐色土 褐色味やや強い | 12 暗褐色土 暗黄褐色土をわずかに含む |

第11図 供養塚土層断面図 (1 / 60)



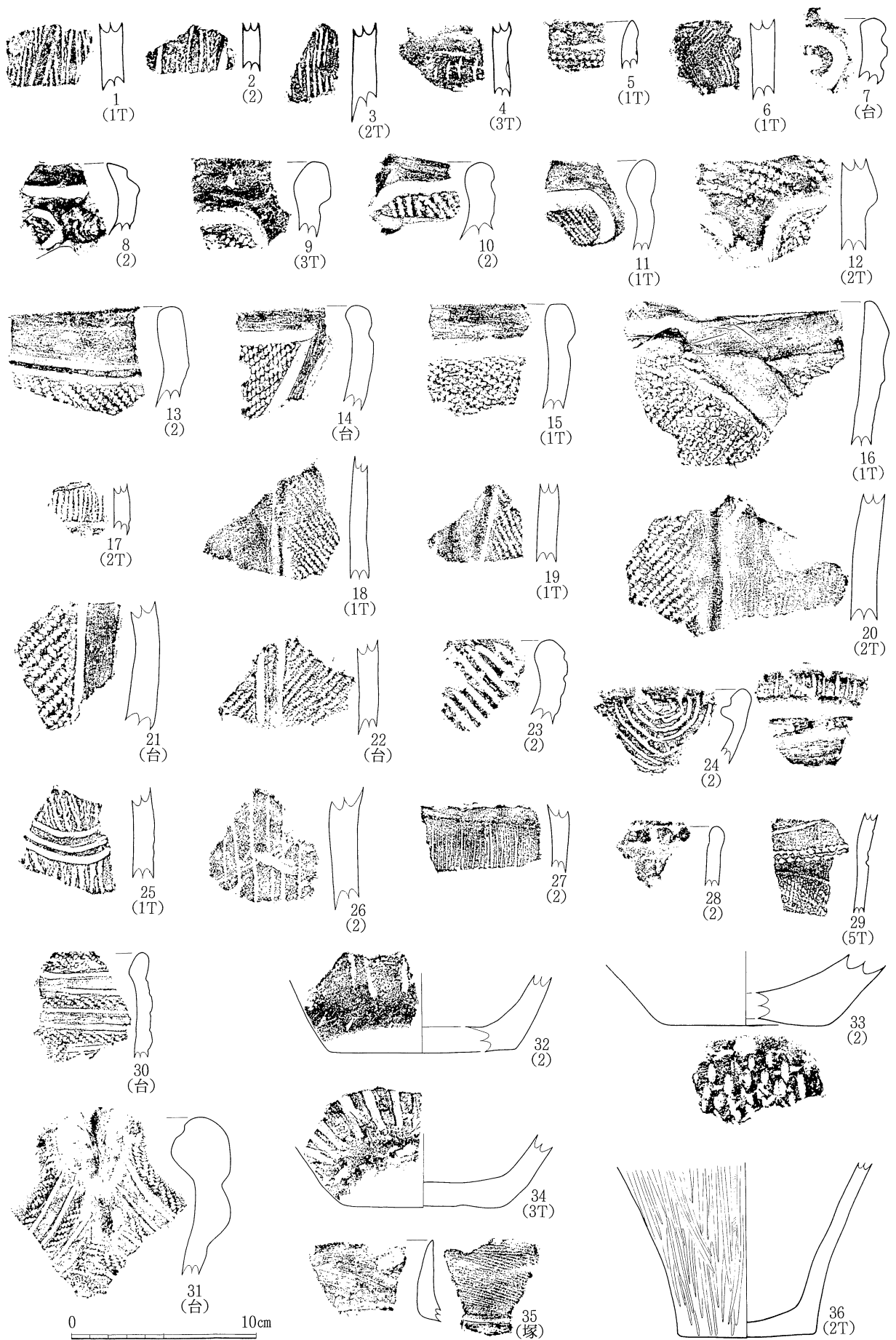
第12図 供養塚下層遺構実測図 (1/120)

際して、縄文土器片が多く検出された。撚り糸文を有するものが僅かに認められ(1~3)、量的には、縄文時代中期加曾利E式、そのなかでも後半から終末にかけての土器がやや目立つ。时期的に平行する曾利系に位置づけられる物(23)、連弧文の一部と思われるものなどがみられる(25)。そのほかに安行式が認められる(30・31)。

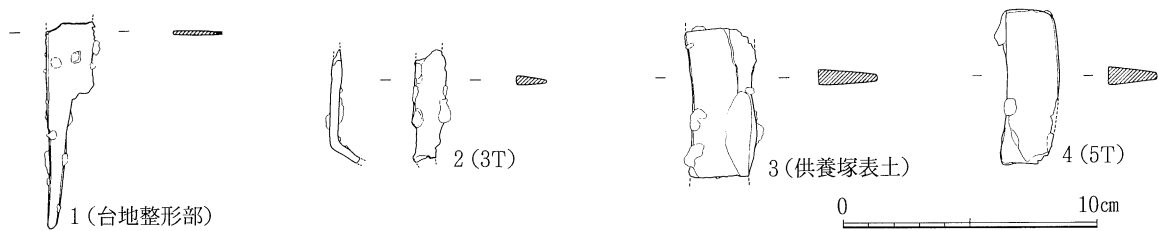
縄文土器以外では、供養塚表土からハケメをわずかに残す甕の口縁部が採集されている(35)。

(2) 鉄器

1号住居で図示した以外には図示したような鉄器がえられた。1は鋸、2は刀子、3・4は大型の刀子の刃部であろうか。このうち、鋸は片関で、茎はほぼ完存しており5.1cmを計り、鋸身の幅は1.9cm、厚さは約3cmである。歯は4枚確認でき、形状としては栓歯でアサリが認められるが、鏽の進行により、ナゲシについては不明である。集落部分の清掃中に出土しており位置については特定できない。伊藤実氏による集成によれば、⁽¹¹⁾ 千葉県内における鋸の出土例は、これまで2例を数えるのみである。市原市草刈1号墳(5世紀)では、同氏の分類によるI類(短冊型)に属する物が、印旛郡酒々井町長勝寺脇館跡4号住居(8世紀)からはII-b類(長さ5cmを越える比較的長い茎をもつもの)に属するものが出土している。今回検出した鋸については、II-b類の範疇で捉えられるものであろう。なお、同氏の集成以外では、市原市稲荷台遺跡においても、鋸の出土が認められている。⁽¹²⁾



第13図 遺構外出土土器実測図 (S = 1 / 3) (カッコ内は出土遺構、「T」はトレンチ、「台」は台地整形部)



第14図 出土鉄器実測図（1／3）

東日本における同類の出土遺跡は現段階ではいずれも奈良・平安時代の集落跡に限定されている状況が認められるところから、本製品についても、今回調査した住居跡を含む集落に伴うものと判断しておきたい。

2の刀子については茎が途中から折れ曲がっている。関については錆により判然としないが両関の可能性はある。3、4については断面が三角形を呈しているのがわかるのみで全形は不詳である。



第15図 出土古銭拓影（1／2）

(1)伊藤 実「日本古代の鋸」『考古論集』潮見 浩先生退官記念事業会 1993

なお、鋸の部位等の名称についても同文献の名称を採用した。

(2)田中清美氏御教示

(3)古銭

いずれも供養塚の周辺で出土している。3点採集されたが、内2点は寛永通宝で、銅銭と鉄銭がある。あと一点は、鉄銭であるが、錆の進行により文字は不鮮明である。上図に示したのはこれらのうち2点である。

(4)礫

確認調査および遺構の覆土中から礫の出土が多く認められた。総体的には、土器片の出土量を凌駕するものであった。礫には赤化したものもかなり含まれている。ただし、後世の台地整形等による移動により招来されたものであることが充分予想される所であり、トレンチ毎の出土量を比較したところで、有効性は低いと判断される。本来ならこれら資料を活かす方法について充分検討すべきであろうが、以上の記載に留め、将来の検討に託すこととする。

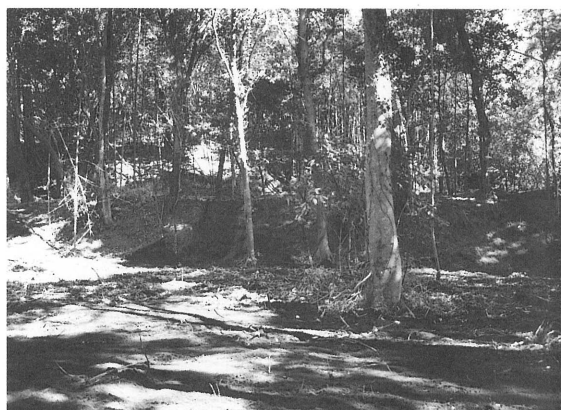
第4章 まとめにかえて

今回調査した範囲は非常に限定されたものであるので、おそらくは断片的な様相を垣間見たにすぎない。奈良・平安時代の住居は2軒検出したのみであり、おそらくはさらに西方に広がっているものと思われる。鋸は出土位置、年代的位置のいずれもが不安定ではあるが、上総国の中心から離れた場所であるにもかかわらずそれがもたらされていることは、当時の鉄器の流通の一端を示すものである。今後の類例の増加に委ねられる部分も多いが、少なくとも稀少な製品を入手しうる位置を占めていたものと思われる。縄文時代についても遺構の検出はなかったが、土器片、石器、礫の出土からは近くに集落の存在を伺わせるものである。

養老川中流域左岸の歴史像についてはいまだに判然としない部分が多いのは冒頭にもふれた通りであるが、今回の調査がその空白の一部を埋めるものとして位置づけられるのではないかと考えている。西国吉横穴墓群等との関連については、今後の課題として残しておきたい。



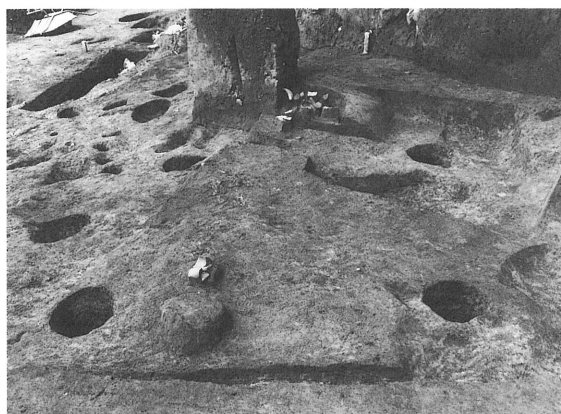
遺跡遠景



待戸遺跡近景



第4トレンチ (西から)



1号 (住居跡) 全景



1号遺物出土状況



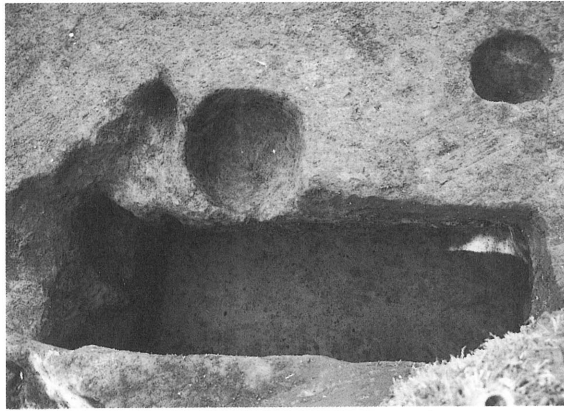
1号カマド遺物出土状況



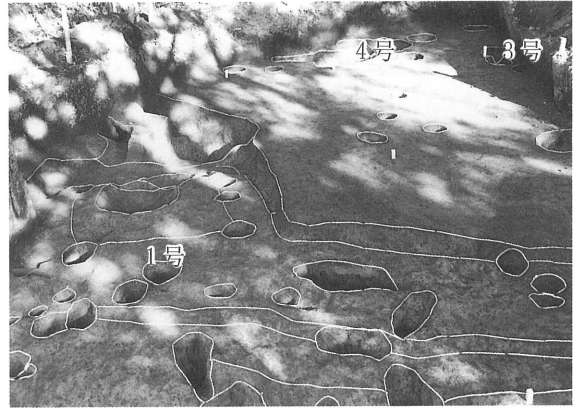
2号 (住居跡) 全景



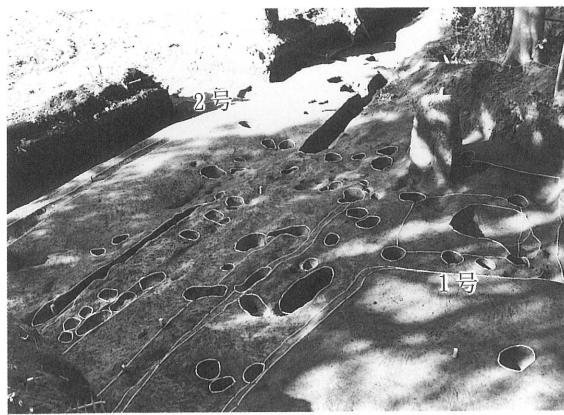
3号 (土坑) 遺物出土状況



4号(土坑)全景



待戸遺跡東半全景



待戸遺跡西半全景



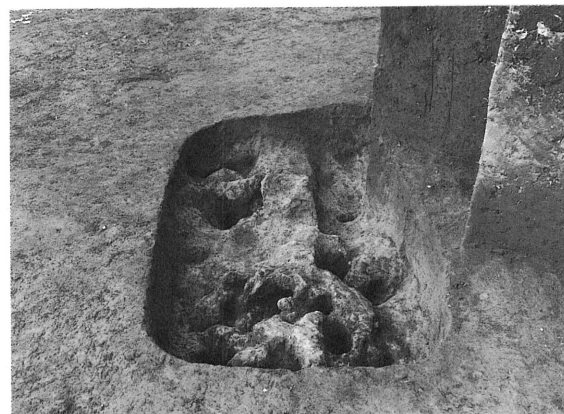
待戸供養塚調査前(西から)



供養塚調査前(東から)



供養塚盛断面(南から)



供養塚下層土坑



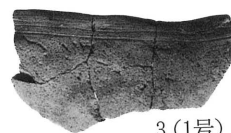
供養塚下層全景



1 (1号)



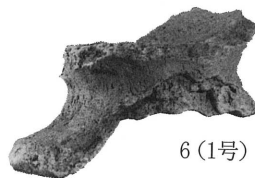
2 (1号)



3 (1号)



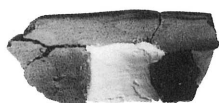
4 (1号)



6 (1号)



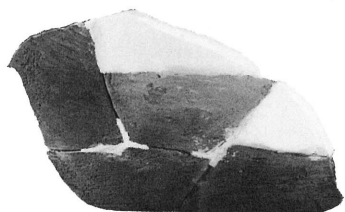
7 (1号)



5 (1号)



9 (2号)



8 (1号)



10 (2号)



11 (3号)



12 (台地整形部)



13 (3T)



14 (5T)



15 (供養塚表土)



16

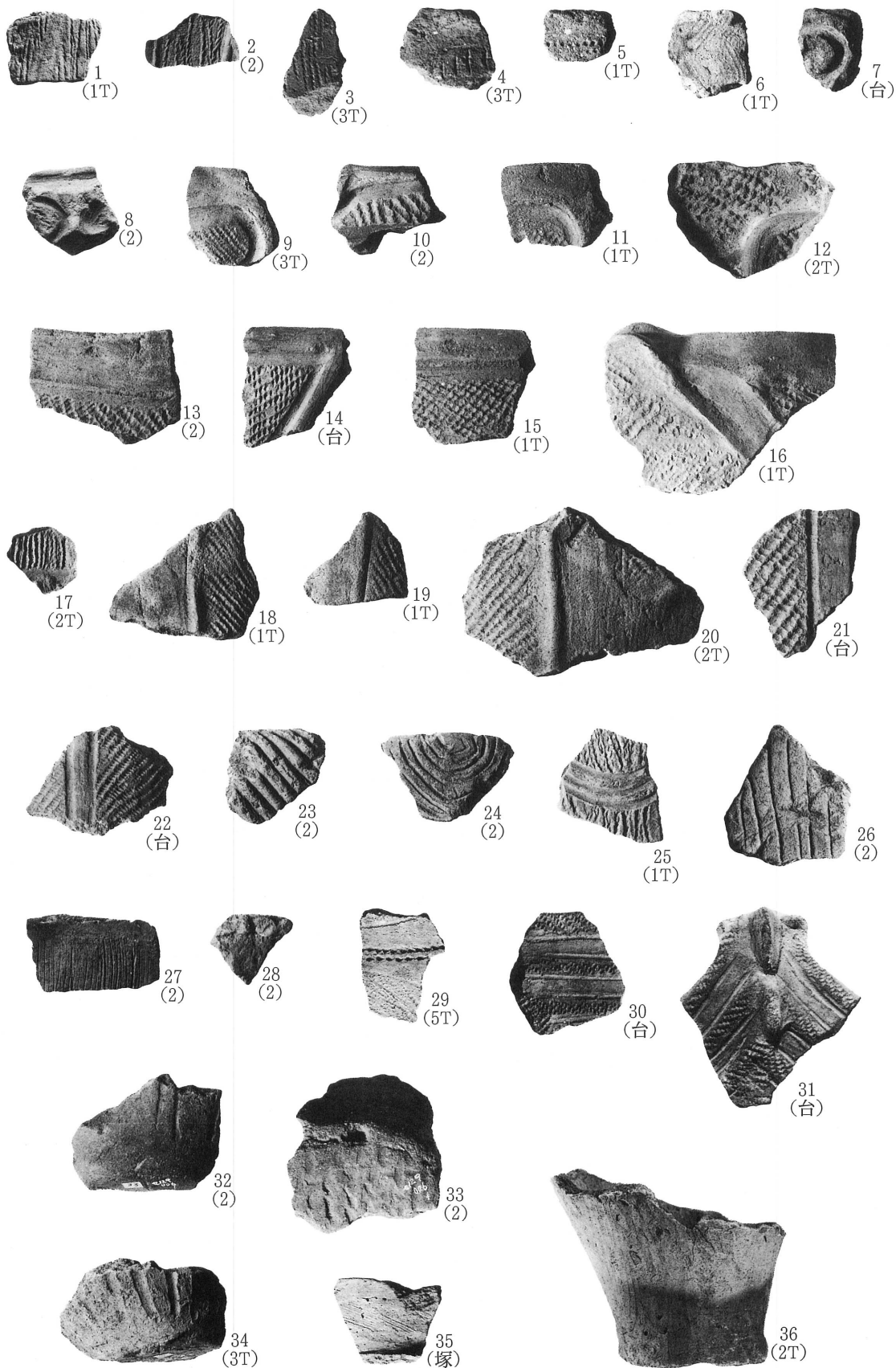


17



18

いずれも供養塚表土
出土遺物(1) (縮尺不同)



出土遺物(2) (縮尺不同、カッコ内は出土遺構
「T」はトレンチ、「台」は台地整形部)

抄 録

フリガナ	マチドイセキ・マチドクヨウヅカ
書名	待戸遺跡・待戸供養塚
シリーズ名	市原市文化財センター調査報告
シリーズ番号	52集
編著者名	高橋 康 男
編集機関	財団法人 市原市文化財センター
所在地	〒290 千葉県市原市能満1489
印刷年月日	1994年3月25日
発行年月日	1994年3月31日

フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡		
マチドイセキ	イチハラシニシクニヨシ	219	セ129	35° 23' 23"	140° 07' 37"
待戸遺跡	市原市西国吉				
マチドクヨウヅカ	イチハラシニシクニヨシ	219	セ129	35° 23' 22"	140° 07' 41"
待戸供養塚	市原市西国吉				

調査期間	調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
19901201-	1750㎡	配水池築造	包蔵地	奈良平安	住居跡2軒	土師器・須恵器	鋸出土
19920228-					土坑 2基	土師器	
				近世	台地整形	なし	
19901201-	480㎡	配水池築造	塚	近世	塚1基	古銭	
19910127-							

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第52集

市原市待戸遺跡・待戸供養塚

平成6年3月23日 印刷

平成6年3月30日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

発行 市原市水道部水道建設課

財団法人 市原市文化財センター

〒290 千葉県市原市能満1489番地

Tel 0436 (41) 9000

印刷 三陽工業株式会社

〒290 千葉県市原市五井5510-1番地

Tel 0436 (22) 4348